

丹羽文雄文学全集 第十六卷
書翰の人 爬虫類

講談社



丹羽文雄文学全集 第十六卷

書翰の人・爬虫類

一九七五年三月八日 第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二・郵便番号 一一二二
電話 東京〇三三九四五・二二二（大代表）・振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価はカバーに表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

©丹羽文雄 一九七五年 Printed in Japan

(文1)

目次

爬虫類.....7

書翰の人.....199

海面.....237

象形文字.....261

甲羅類.....283

嘘多い女 299

愛欲の位置 325

悔いなき愉悦 347

創作ノート 383

装幀・辻村益朗
(写真・一九四九年頃)

丹羽文雄文学全集 第十六卷

書翰の人・爬虫類

爬
虫
類

一

名護真千子が、良人の悪徳の符を捺された女たちをたずねて、何となし話を交してみたいと希望を抱いてから、幾年が経ったことだろう。終戦のどさくさで、しばらくこののぞみは忘れられていたが、徐々に頭をもたげてきた希望は、もはや不動のものとなり、怨恨をまじえる筈の邂逅に歓喜の情すらあてにするようになった。こののぞみは、ずうっと以前からつづいていたように思う。運命が名護蔵太と直面させた時から、この思いが彼女のなかに支度されていたようである。

その日、彼女は田圃のなかの小さい駅におりた。白い道がまっすぐ、丘のふもとまでのびていた。たれひとり歩いていないが、道である。両側は、稲のあとがほりかえされて、荒いうねをつくつていて、葉がうわっている。葉っぱは、霜でたおされていた。歩きだした真千子は、顔の上に黒い土の匂いを感じて、ふかふかと胸のおくに吸いこんだ。ついでに空を仰いで、陽のあかりをさがしたが、うすら陽であった。空の蒼さをうすめるものは誰かという誰か

の詩句が思いだされる。蒼味はうすれていて、空いっばいに寒さがよんでいた。風はなかったが、西風にさらされるように真千子の頬は段々と冷たくなった。皮膚のうわつらが凍てついていくのがよく判る。ふりかえってみる。まだそれほど距離も歩いていないのである。一本の白い田舎道が、気がとおくなるほどのびている。何と確信をもって、この白い道は、村のなかに突入していることか。

村の入口が見えているのだが、なかなか近付けない。距離をちぢめるために歩いているのだという気が少しもしないのは、おかしい。この道では、時間の足までとまっているのではないか。うねのあいだの水面に、うすい氷がはっていた。眠りこんでいる大地、春のとおいことを思わせる黒いうね、うね、うねの展開。葉が立ちなおれば、黒い田圃に、一ト刷の緑が走るのだが、それがいつのことやら。何となが道だろう、と彼女は後悔した。ひきかえそうと思えば、できたかも知れない。真千子は目をじた。歩行のつらさで、せっかくのわがころが追い落されまいとして、顔をまっすぐにあげる必要があった。吹雪にむかつてすすむ運を感じる。因循と弱気のあまり、自分が自分をこらす下手人となることは許しがたいのである。魂に訴えるものだけが、自分の中で、自分をつよく支配しているという確信が、錯覚であってほたららない。彼女のコートに見えかくれする素脚は、すでに知覚神経をうしなっている

た。足の皮に、一枚の、感覚をまったくおさない膜がはりついていた。

村の入口にさしかかると、うしろからきた自転車が無造作に追いこしていった。村は、思ったよりも起伏のはげしいところであり、道がふた手にわかれていて、一方が急な坂になっていた。二つの道にはさまれた農家の庭に、老人が靦をかきならしていた。真千子は、声をかけた。

案の定、急な坂を上らねばならなかった。ゆっくりとのぼりはじめるが、農家の庭の梅の古木のいただきを歩いている工合になる。竹藪があった。急な坂はそこで切れたが、歩行がらくにならないところを見ると、道はまだゆるい傾斜になっているらしい。古風な火の見やぐら。小さい林、畠、農家が点在して、そのむこうに山がせまっていた。教えられた家は、見当がついた。真千子は再び、山村の空気を胸のおくに吸いこんだ。音のない、もの忘れたような靦配が、ずうっと前からつづいていたようである。まるでよからぬたくらみを、この静かな山里にもちこんだ人のように、気がとがめた。と、突然、諏江テルの、見たことのない顔が、真千子の胸にめざめた。名護蔵太の子を二人までうんだ、三十五歳の、この村の人間ということよりほかに、真千子は女については何も知らなかった。運命が左か右にすこしそれていたならば、生涯諏江テルの存在は知らずに終ったであろうが、名護蔵太のおかげで、自分にと

っては諏江テルが代りのない貴重な実在になった。諏江テルにとっても、名護真千子が、見たこともない顔であると考えてみて、真千子は妙な気がした。しかし、屈辱にはとおい感情であった。偶然、どこかの途上でゆき会ったと描いてみる。互にごまかしようない辛辣な存在でありながら、気がつかずにゆきちがってしまうのである。そういう風にしようと思えば、出来るのだった。真千子は、ちょっと得意だった。運命の手を、自由に動かすことが出来るという気がしたからである。彼女の足が、納屋と、きこく垣のあいだにはいった。運命の足どりととは、このように慎重であらうかと、馬鹿になった、冷えきった自分の足を眺めやる。両側に畠があり、つきあたりの表庭には、一面に新しいむしろがしきつめられていた。一粒も無駄にしない用心ぶかさで、靦がほされている。かきならしたあとが、波状をつくっていた。真千子は自分でも知らぬあいだに、挑戦的な顔になっていた。

無人のようであった。見まわして、息をひそめる。きき耳をたてた。鶏が鳴いている。あれは、餌をつついて鳴き方だ。真千子は、舞台の中央に立った。観衆の目が、そそがれていると意識する。さて、自分以外の人間になることの精神的な修業は、相当に出来ているつもりであった。屈辱、怨恨、激怒の芽は、ほとんど引き抜いてある。たとえ抜きわすれた芽がのこったにしても、引きぬくため

には少しの努力ですむ筈だった。そう真千子は、自分を考へてみる。とはいふものの、ためしてみなければ判らない。誰もいないのか。開けはなちの入口が大きな口を黒々とあけていた。鍬が壁にかかっている。自転車の空気入れが、高い閣のこちらにすてである。いろいろらしいものが見える。だが、火も消えているらしい。ひとのいる気配は感じられなかったが、音もなく入口に、男の子があらわれた。十三か四か、異様に大きな頭をもっていた。首が細く、血色もよくない。

「今日は」

少年は、やっと真千子に気がついた。このあたりに見かけない、町方の中年女をそこに眺めても、少年はいっこうに興味をもたない風である。真千子は微笑をうかべて、みるからに病弱なこの子の、この家における位置をみぬいてしまった。彼女はにがい氣持を味った。まさかこの子が？自分の味わり予感のたしかさを、彼女はこれまでにもいやというほど思いしらされているのだ。

「諏江テルさんに逢いにきたの。近くの畠にいらんだったら、よんできて頂戴」

少年は、あいかわらず無表情な目を据えていた。何としても、おかしな訪問にはちがいないのだからと、真千子が喉のところで言訳をはじめると、少年が横とびに駆けだした。恐れを感じた小さい獣のようにすばしい。

真千子は、あらためて周囲をながめやった。中流程度の農家である。納屋も立派な瓦屋根であり、庭木にも手がゆきとどいている。硝子戸の多い家だ。真千子は、もっとみじめな農家を想像していた。その方が、都合がよかったからだ。その上に、ほしいままな想像の図をひろげることが出来るからだ。汚れた硝子戸を見つめている時、本能的に、あの女の近づいてくるのを感じた。精神と肉体が、あの女の近づいてくるのを微妙に感じとった瞬間、真千子は、これから幾日も、幾夜も、いつ終るかわからない良人との共同生活が、自分の前に俄かにひらけるのを感じた。その無情にながい時を、良人のそばでくらさなければならぬのだ。ああ、と声をのんだ時、がんじょうな、色の赤黒い中年女が、気色ばんだ顔をあらわした。

「テルさんですか」

相手は、半分、うわの空であった。

「はあ？」

あいだに、靱をほしたむしろが七、八枚、距離をつくった。

見たことのない顔は、想像でおぎなえるものではなかった。が、意外とは思わない。まっ黒な、もてあましているような豊富な髪が、なかなか印象的だった。つやのある額には、ふとい皺があった。うすい野良着の下には、逞しい

からだがみなぎっていた。三十五歳といえ、このあたりでも、はたきざかりであろう。掌も男のように、肉が厚くて、大きい。斬りとったような深いひび割れをみせている。牛の首のような皮膚のたるみをつくるには、農家の仕事を追ひこしているらしい。その目は、牛の目を思わせた。真千子の胸に、しのびやかに昂奮してくるものがあった。これだけをたしかめるのには、一瞥で足りた。が、諏江テルの人間描写をたしかめにしたのが目的ではなかった。どうでもよいことである。明日をも知れない病床の彼女であろうと、びっくりするほど美しい女であろうと、そんなことは真千子の訪問の目的の外にある。牛のようなおだやかな目に、この一瞬のあいだに、自分がどのような印象をあたえたことだろうか。おたがい無遠慮の交換である。何ものとも知れない、町方の中年女。時が女の年齢を容赦なくきざみはじめている顔、目尻の小皺、小柄なからだを、黒っぽいコートが包んでいる。コートの裾からこぼれるものは、年齢よりは地味な柄だが、この土地の女にくらべると、まだまだ派手である。まぶしそうな眼をして、自分を眺めている得体の知れない中年女。大きな眸だ。額がひろい。それをふさぐために、髪の毛を三つ四つカールさせている。うすく唇を塗って、香水の匂いをさせている。中年女の脂肪ぶとりが、胸から発して、肩に、頸に、頸に緩慢にあらわれているが、くらしの匂いのまったく

がった世界の人間であった。

「どのようにお話しあげても、うまく言えそうにありませんの。何故わたしが訪ねてきたかということについて……困りましたわ」

真千子は、靄をふまないように近付いた。

「あなたをびっくりさせては、いけないんですけど、やっぱり、びっくりさせる他には方法がございませんの」

「どなたですか」

「あなたのくらしを、おびやかしに來たのでは決してありませんのよ。でも、やっぱりおびやかすことになりすわ。お話している内には、いくらかわたくしの気持も判って貰えるように思うんですけど……」

名乗りをあげた時、諏江テルのがんじょうなからだに、硬直した線がはしったのを真千子ははっきりと見た。諏江テルを突然不幸の淵に叩き落とすことの出来る人間は、真千子以外になかったからだ。いちばんおそろしい深淵をもうけることのできる人間として、諏江テルはながいあいだかかって、その覚悟を用意していた。目がすわり、顔いろが変った。息があらくなった。諏江テルは、必死になった。新しいむしろの上に、へたへたと崩れてしまおうと思えば、出来たかもしれない。牛のようなおだやかな目は、恐怖にゆがみ、追いつめられた獣に似た。ひび割れのした両手が、のろのろと、胸のところで上下する。まるでひと

良人をねとった女が、その妻と顔を合わせた場合のようにおそれ、おののいている。ついこの間の出来事のように怯え上った。辱しめられた人妻の慍りと怨恨で、口が利けなくなっている。

「いいえ、わたしはそんな恨みをいいに來たものではありませんよ。思いちがいをしないで頂戴。だってそれは遠い昔のことでしょう。ただ、あなたにお目にかかつて、お話がしたいと思いましたの。あなたってどんな方かしらと、子供みたいに逢って、ゆっくりにお話がしたかったですわ。ほんとうです。それ以外に何の目的ももってはいませんの。そんな顔をしないで頂戴。それじゃわたしは、すぐかえらなければなりませんわ。わたしがあてにしてきたのは、そんなお顔じゃありませんわ。まるでひとごとのように、あのひとのことについてお話がしてみたかったです。いやみだなんて、思わないで頂戴」

真千子は早口に言ってしまうと、がっかりした。これを口にすることは厭でたまらなかつたが、何の甲斐もなかつた。諏江テルは、世間のこうした場合の、こうした立場の女が感じるであろう型どおりの感じ方を見せて、解釈を下して、それ以外にどうにもならないのである。一途におそれ、おののいている。

「それじゃ、こうお話し申し上げたら、あなたはきっと安心して下さるでしょう。あなたのような立場のひとは、決

してあなたひとりではございませんのよ。あの縁側で、腰かけてお話しますわね」

いろいろと、そう解されても仕方がないやり方で、真千子はむしろを渡った。腰の高い縁側にきて、かるく身をもたせかけた。そして、相手が近付くのを待った。真千子は縁側の、ふかい雨戸の溝を白い指で撫でてみた。よいしょ、と掛声をかけるようにして、縁側に腰を置くと、片手をつっぱり、踏みしいたコートにゆとりをつけた。

「蔵太と交渉のあった人は、みんな、十二人もございますのよ」

うれしそうな声を、真千子は出した。

「ね、数えてみましょうか。年齢の順からいっても、先ずあなたが最初ですわ。それから南井里子という、二人まで蔵太の子供のある人です。この人とはもう大分逢っていないとみえて、顔もろくろく思いだせないといっているそうです。忘れてしまうのも、無理じゃございませんわね。次が、岡真子、これは名古屋の芸者さんです。次が、鬼頭ツル子って、豊橋の駅の近くに住んでいる、もと名護商事の事務員だった方ですわ」

真千子は、指を折りはじめる。

「五人目が、絵路って、もう六年もつづいていますのよ。ちゃんど一軒をかまえて。次が、園美津枝、名古屋の芸者さんで、子供がひとりあります。妾宅をかまえています。

七人目が、亀吉、もちろん芸者さんですね。八人目が、田中歌子、もとダンサー、このひとは墮胎しました。二十五といいましたわ。その次が、川崎珠子、事務員。十人目が若井庫子、名古屋支店の事務員で、まだ若いんですのよ。十一人目が大津静子、このひとは現在の蔵太の秘書をつとめていますわ。二十四歳より若く見えますけど。十二人目は……そう酒場のマダムで、植草淳子といいましたわ。よくしらべてあるでしょう。大津静子が教えてくれました。自分だけはそうではないと、思いこませるために、十一人を洗いたてて教えてくれましたけど、別のひとから現在の秘書もそうだってことを言われましたわ。わたしは、十二人の名前を暗記していますわ。いいえ、ちっとも恨んでなんかいません。子供が、自分のおもちゃは、みんな暗記するように、度々思い出している内に、もうすっかり暗記してしまいましたの」

諏江テルは、はっと安堵していた。一人のうける分が、十二等分されたわけである。それに、自分は現役ではない。すると、たれかのように、名護蔵太から顔もわすれているかも知れないのである。消えてしまうことも出来るのだ。そう思うことは、諏江テル次第であった。彼女は、それまでつつ立っていたが、縁側に腰をかけると、にやりと笑った。真千子は、相手の遁走を見てとった。すると、その安全感に加勢してやりたくなかった。

「それで、いま、あなたはもうくらしをしていらっしゃるのでしょうか。あなたのその後のことをおききしたところで、わたしに何もしてあげることは出来ないんですけど、お子さんは、お達者ですの」

「ありがとうございます。子供はふたりとも丈夫で……」
諏江テルの表情が、曇った。見そこねたのではないかと、真千子はわが目を疑う。

「上の男の子が、どうしたものか、生れつき、からだが弱くて、十五、六までは育たないだろうと医者にも言われています」

あの頭の大きな子供かと、口に出かかったが、真千子のはのみこんだ。人情ぶった台詞は、無用である。同情されては、このひとだって困るだろう。いや、或は、まるで関係のない人の同情のように聞くかも知れないのである。そんなことが、おかしくも何ともないのだろうか。そういう心とは、いったいどういうものか。

「下の子供が、それはそれはきかぬ気性で、困っております。二人のつれ子をして、この家に後妻にまいました。先妻の子供をいじめて仕方がございません。子供には、遠慮がありませんので、いつも親が泣かされます」

「それだけが苦勞で、でも、くらしの方には、何の心配もございませんのね」

「おかげさまで、わたしのような女には、いまの身分が、